



^ 13
3336
1

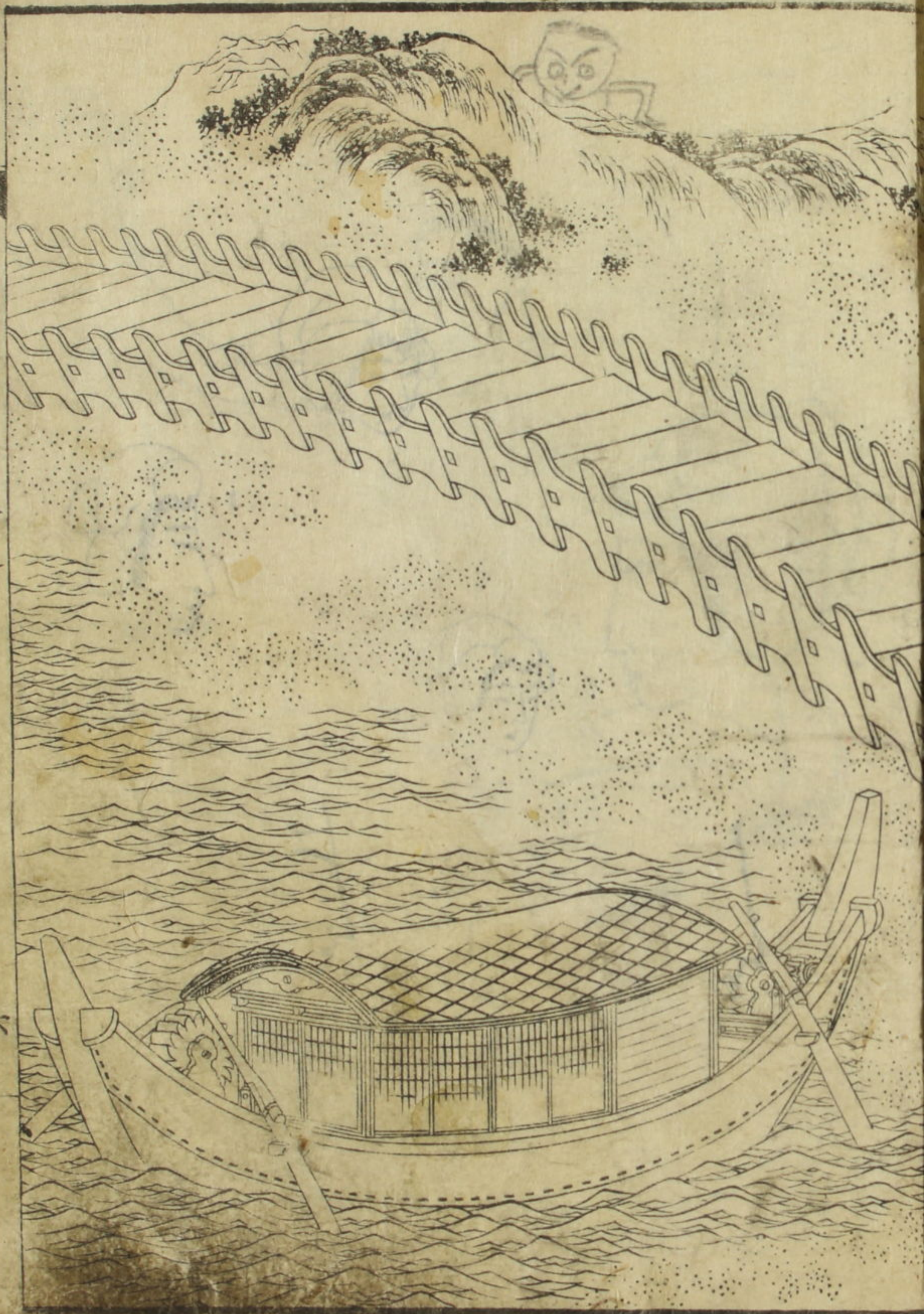




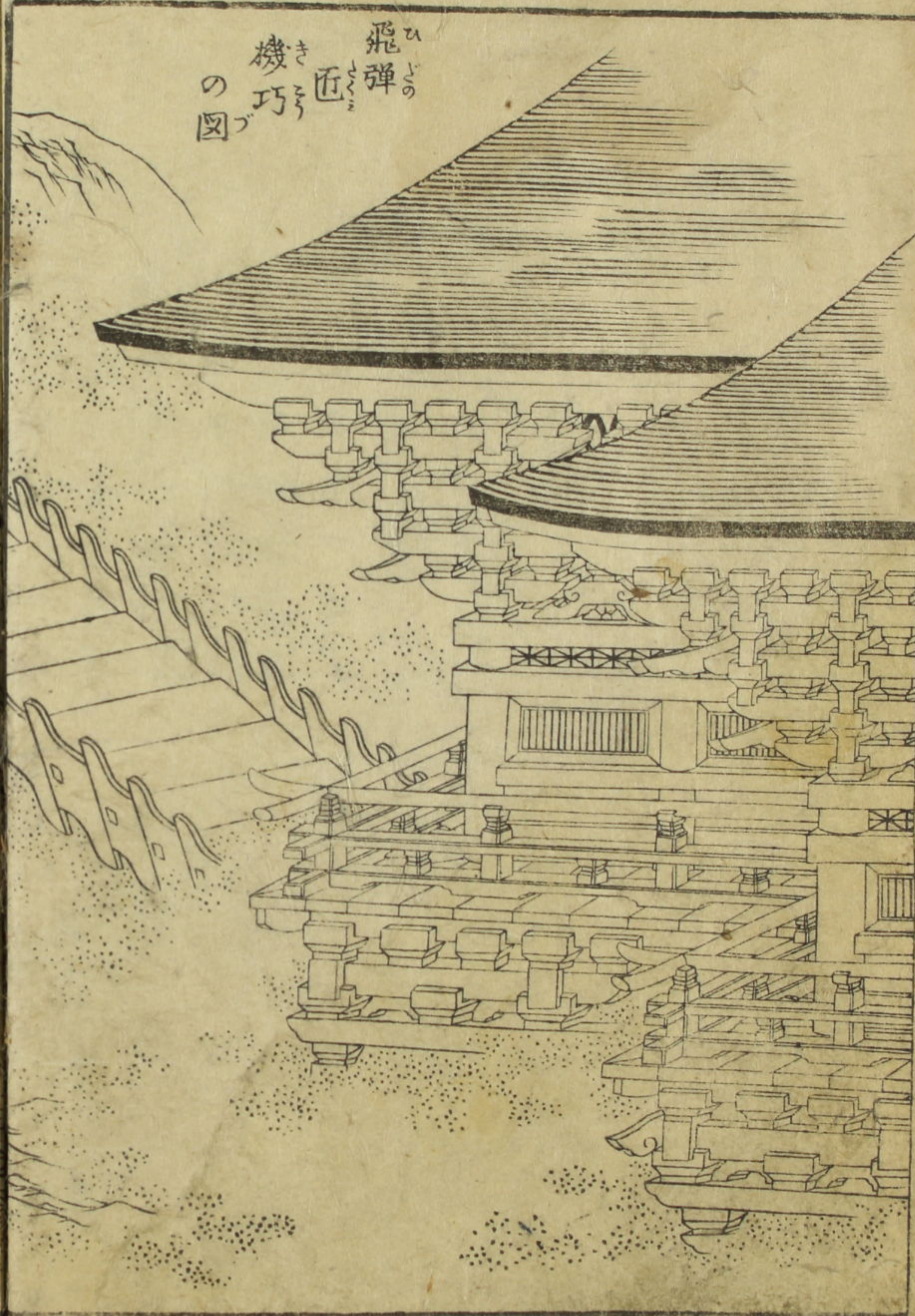
羅^ハ柯^ハ斯^ハ拖^ハ枳^ハ。
 彌^ハ武^ハ牽^ハ儼^ハ彌^ハ偉^ハ。
 儼^ハ預^ハ拖^ハ籜^ハ柯^ハ儼^ハ。
 籜^ハ柯^ハ例^ハ旨^ハ該^ハ謎^ハ。
 拖^ハ柯^ハ我^ハ志^ハ能^ハ。
 羅^ハ柯^ハ那^ハ須^ハ陀^ハ。
 須^ハ該^ハ替^ハ彌^ハ俱^ハ。



飛彈の匠



飛^ひ船^{ぶね}匠^{たくみ}の
機^き巧^{こう}の
図^ず





僊人
 くまのつをねる
 煉薬の圖



斐色匠物語卷之一 是よりウヤの世の世にたれ

○すみみち

斐色の匠とは人ひとりの名はあらざいし飛騨国よりは庸調を
 してまつるが里おとよ匠十人を出しておほけの造管をほしめ
 いとあそしあり貞觀の比ら一國より百人をめさきて朝堂院神泉苑
 あどつらうせぬ事國史に載りてつらうあそしつらうあり
 飛騨人の中子さそきて機巧よしよして其術神に通じて天地造化の
 不可思議あるをもしと雖鑿のうし生木頭を以て鳥とあり板行を
 以て馬をつらうて一世の人を教馬かせしかよき匠夫が物語ありその
 時代はたしう丹波つらうをいづ生の時時よりあり人斐色の国は諸名
 部の墨繩といふ者ありつらう父母はそくあくありておのれ一人を

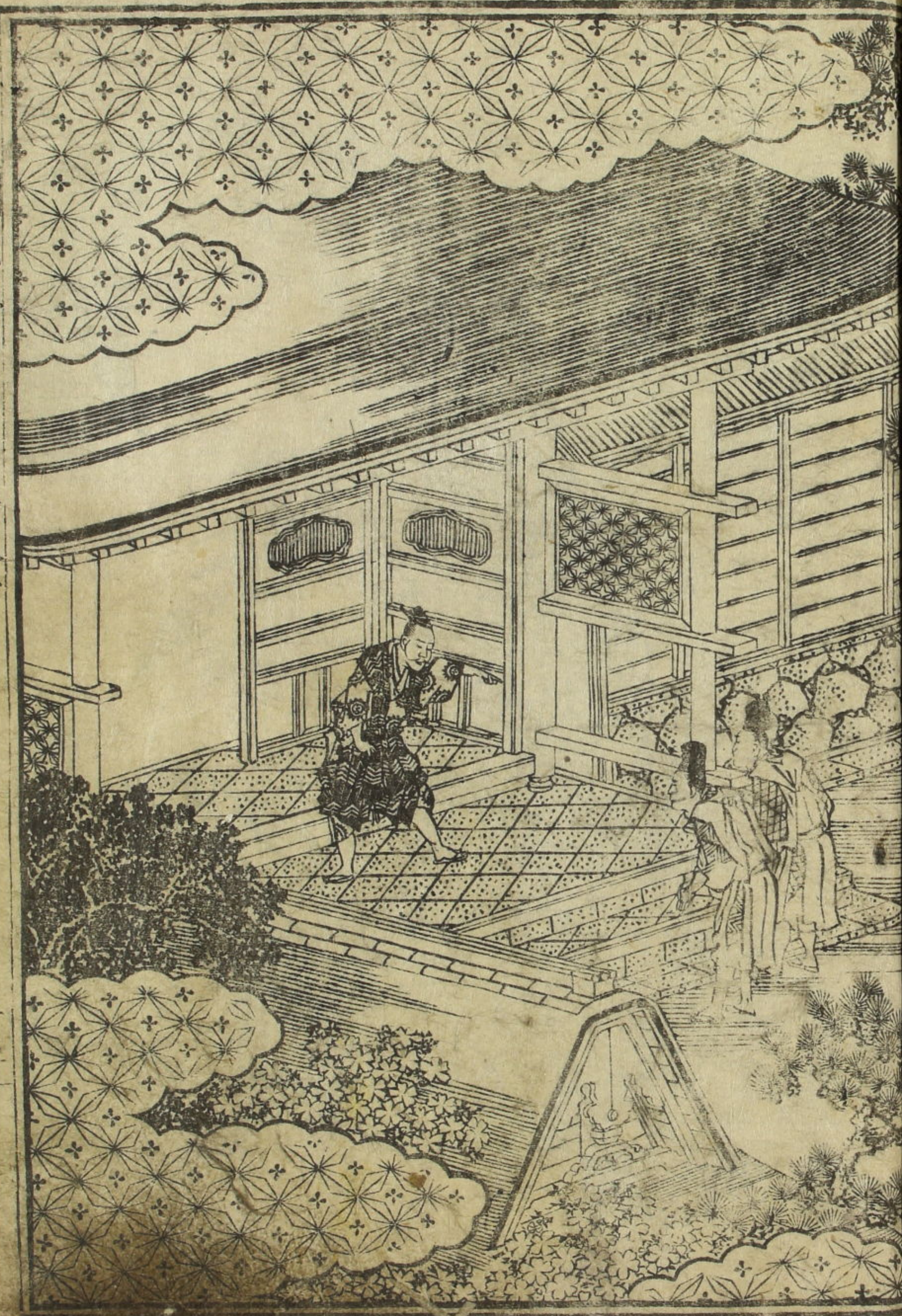
住る此国のあそしは田畑を耕はしはみちを鋸鑿をとりてひし
 さしう工匠の業をあらひたる人よまはさきてめでたくつらうありし
 老士の輩もあそしく感服して直の良工ありとはおのれありける
 墨繩ますしく精神をあらしく修練しなれども今をた右まき此道の親
 とありぬあるハ鶏をつらう生むはここの鶏これを見て両翼をひろげ
 て飛かり嵐をつらうば猫きこらてらまを捕りあどしてさあぐた
 ちるあそせもありなれど遠近をいそぎ人なれを慕ひて調度玩物の
 具あどあつらひおきる者門前市をあらうるさしうど心まがしつらうもの
 又権勢を以てめとむる者ありつらう者よませず貧人老夫あそ
 ちつらうちやがていへあそし作りてぞあそくその比郡司よて紀の
 武俊といふ者あり慈悲のらうちあそ財を會りて常丹農匠を

かさめあまどりてほしき母ぞふるまひくるけ武俊酒を好く飲
 々をど盃ひつを墨繩子につく作らせんとて徒者をめてしひ
 おこしる墨繩子かまが悪行をふくみをうたれたとみおもつら
 目をさしる武俊をうらちてこの小冠者め郡司をもたかへ
 何まどまどなすゆてあまこと奇怪な身とて後者どもよしひつけて
 からめてこよといひつけてやうつ徒者も墨繩子門のまよひつうて大
 子ひひくる郡司のめさるくどとく出よとあままどりなれど
 丹若さまは鞋のまよひかけのあつて障子ひきあけてしんとさるま
 いろよつくりまなん障子おしあらとそそのま後者どもがふみか
 るるやうともまさらさぬまうつがうて五人の後者どもこまぐ
 子落りぬ存の下ハあらく先をあらうてありままバのあまき
 あしはよめの勢ひも似ぞ大におそきこあつてまをあまき
 のひひくるハ墨繩子をいせハ郡司のいひつけてしうて令
 たさけ力をあんと多うよけく其時墨繩子があつてかろくとま
 階子をあろしなれどこままとうつきてよりまてまもく墨繩子が
 手をつきてしひひくるハ後郡司のめまよひつうめますハワ
 いうちあめをうたぬをんあまをいほとくまかこまい
 うらめんを救をせむしを墨繩子がいたくワまバ
 そこしものいよおどろくままバゆきてんてまま
 だ徒者ハよまあむてあうまもつて郡司をひりま
 えて眼をたまくあし額ままぢをい
 つきて何事のゆてかく火急まはめ

源氏物語 卷之六

七

我あつてつかり一盃月をふきど作り出さず汝郡司をばいさあるめのと
 思ひてさかしまあづつらぬはまをささごいでおのきご志せうらあ
 ころてさうをわんとつらんとよんんと黒繩をさうよりけりみ
 する物とり出でうちさげてめめせめ盃ハこま子れおのま子取
 足せなま盃ハおまらちやうさてゆあんといふ郡司まあ顔
 ちあしてさてハ盃ハとつらまらとやさるまつられる料子けひと
 こぶハあつてつらまらといひて盃をとりてかまて我らつえん
 事をおまらうまおまら物を見せんざらるる今ハ用あつてくむし
 といひて黒繩をおまらやちりて盃をさうくんであまさかへく地り
 てくるとまもたまらんとてあつておのま子らうとちりの郡の郡司の入
 来りたるを生居まとはして物清して後かの盃とり出であまら今ハ日
 ちあてえらる物まてゆこまて酒をさうまらせんよまて酒より出
 してまむとて先おの盃手子とまてめのけら子つがせらる子いさある
 かうけ盃おまらまおのちりておまらまをさうておまらくねだおの
 けらをさうまらうつて又盃をさうとりて酒つがせらる子石をさうを
 めららんとちせらまてえめら子とて又まらかへけてまを酒
 ほらとまらてまらまらまら客ある郡司もまらまらて同く取あけて
 酒つがせらる子盃かへまら酒ハみまらまら右のま子めらとく酒を
 つがせらる子酒をさうまら盃おのねとさうまら子かへらぬ力を手はね
 いさかへまらとまらまらまらまらまらまらまらまらまらまらまら
 心地まらまらまらまらまらまらまらまらまらまらまらまらまら
 あまらまらまらまらまらまらまらまらまらまらまらまらまらまら



飛騨の国の面丁
内裏（まじり）



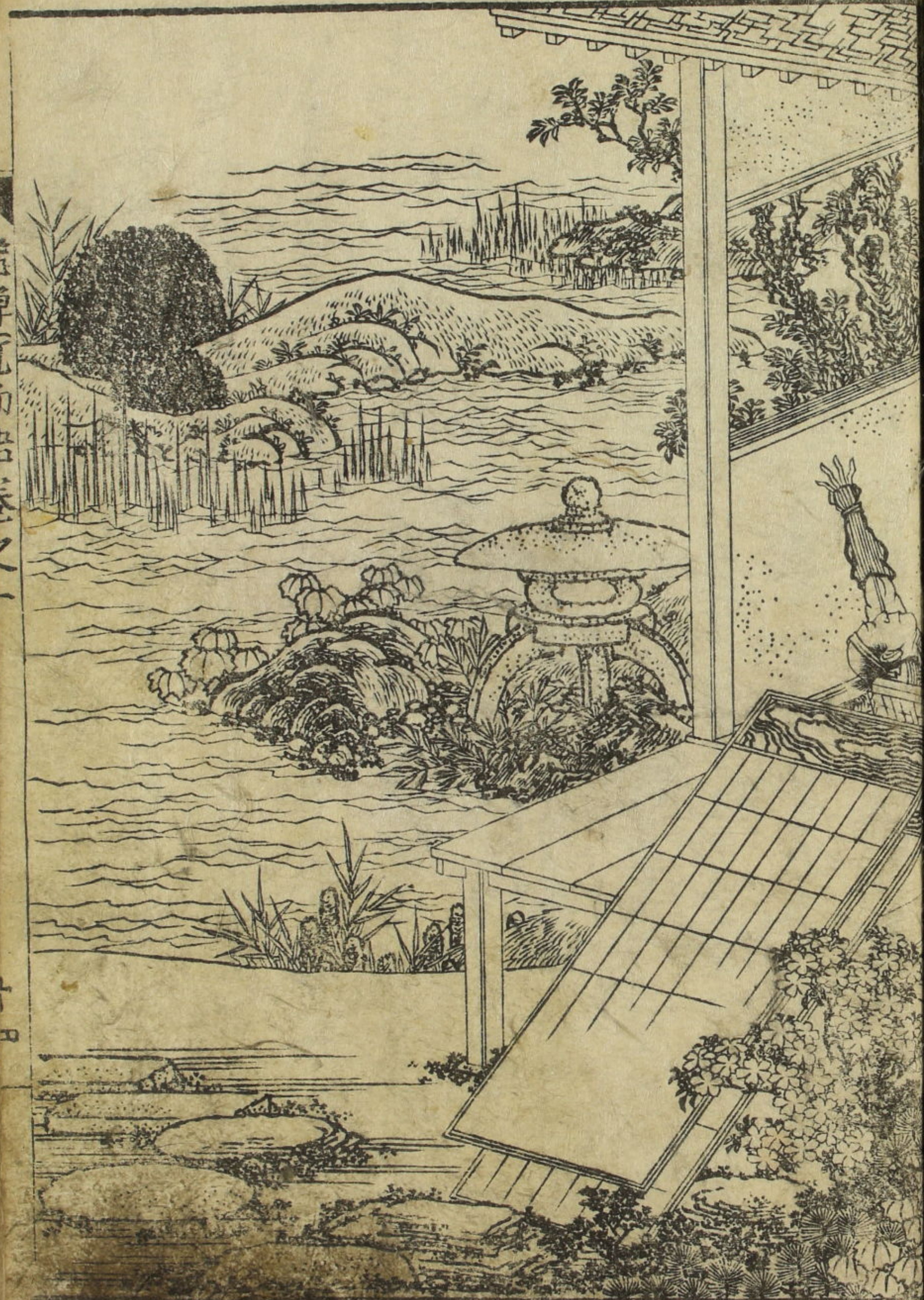
墨繩がつくれ
木雞へまことの
あそびの
あそびて遊ぶ所

心算心算



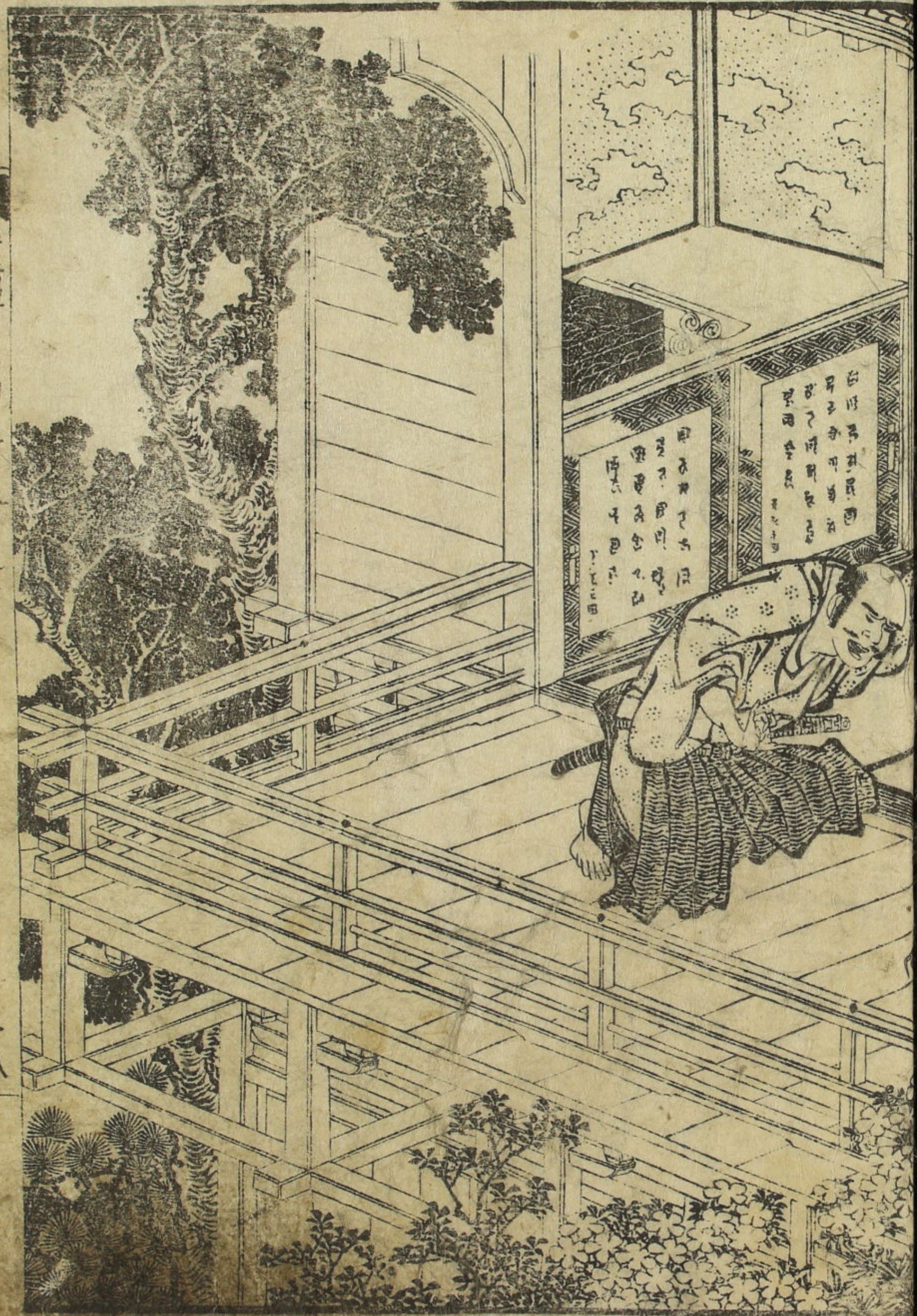
心算心算

長草了山の古巻之二



郡司が
郎等
匠を
捕へん
来りて
おと
入る
あ

長草了山の古巻之二



飛鳥一初吾公

十八



松光飛騨の
匠と各
手練の
不とを
くらん
見を不

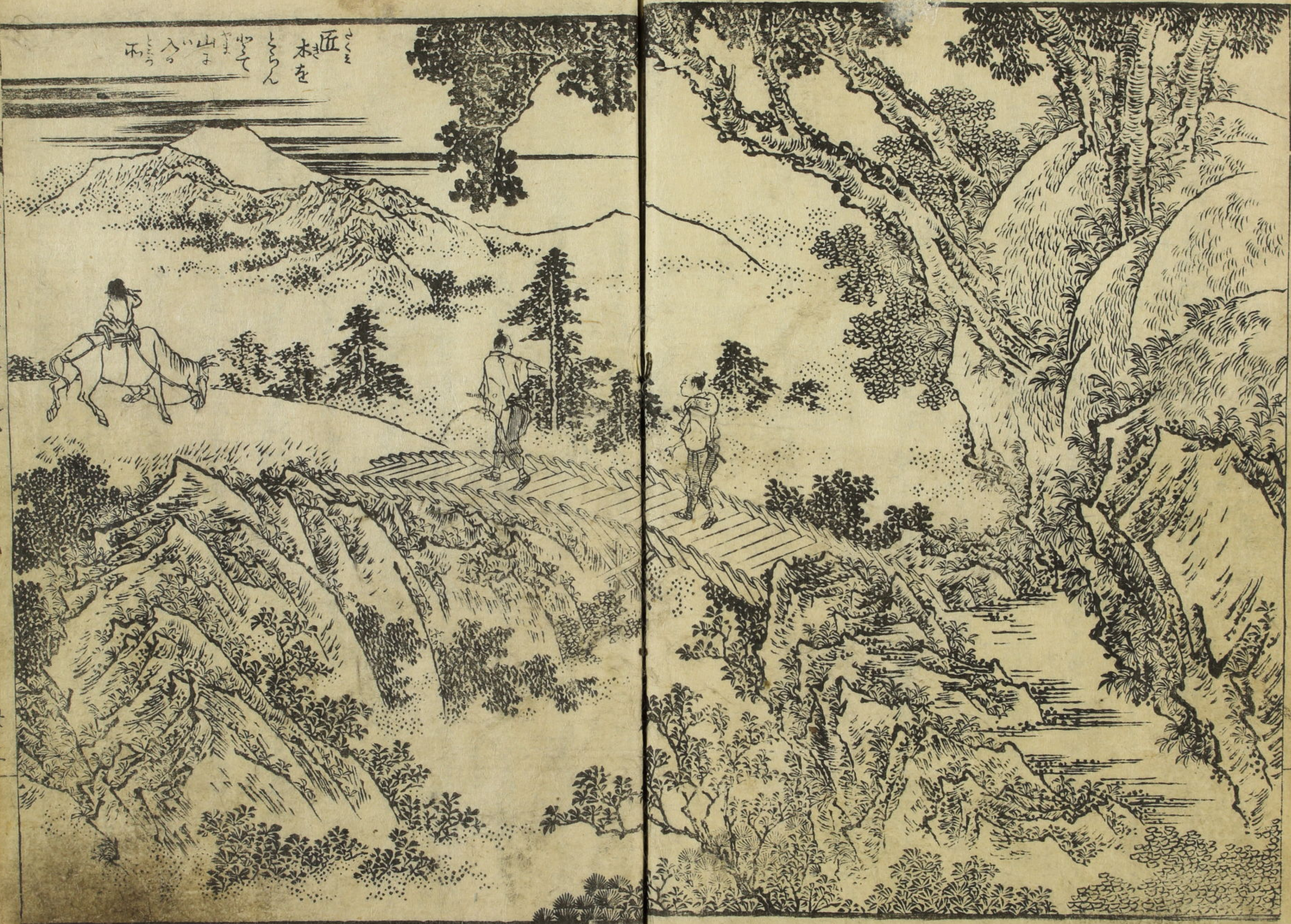
三ノ月廿三日

十八

志るるむむらひの岸舟年を終るるまきの本とてり。かきを伐りとり
しつらんまはこまよませる良材ありと松光がいたを墨繩が舟に
さかのりいでけ各子橋うちつてんとて松光子負せたるはくみ
とりてひまをけむ中よらごのやうある物いさうともなく入まきし
る身をつぎあせつ身た階子のやうあるかもしらありぬ墨繩がの
まごごやうの物をとりてむらひめ谷へむけてもこの方をあげく
ひらのかけしとちありたり我子つぎまきつてり松光
志り舟しもて行くよ大方あやうき草ありぬ山路よりかくる物こそ
用をあらくまとして松光のよく墨繩が用意をせりあたるさして
かのまきのめと舟いさうらりありありみつりまきつてり松光
志りうちかけてやまむらじかたのよめて笛の音はありかくる深山よ

何れめり入まりんとしてあみみん草刈りつもの十なりあるが
筋を看みあひる笛音ありつて来り墨繩を足してまらけ國の
くらみとびえざる楮名部の墨繩ねよおたまるめやしい墨繩か
童のいそがが名を知りたるあんとあぎあぐるまうかていふ
童がいたくけ奥山よまめる人ありそまを待ぬまひす今日ら子
入まりぬらんあまバおの生子先行むらひ其由あせまねの
まきとて笛のまうと此道と折してゆきぬとてかあ舟到り
ぬらんおのま草を刈て後跡よりあくんまきまもあひ往ぐ
とこの墨繩心得た其後まんとぬらんあひあるはかめら
ゆらん童まづかこ子行く其子細官をせぬらひさして又笛
うちあつて山をあて行ぬ松光がいたかくる深山よんまむら

匠木を
とらん
やま
い
山
入
雨



比叟工の吾

十三

八ノ月廿一日

ほど倦つりしほど。まのこのかたよよりて。膝まゝして。ねあゝめりや。
 甲斐繩脊を歩て呼醒とてけふ人同く同かきぎ。無禮をせむらぎこと
 ぞ。松光不貞げある事もちて仙人の物をみするものや。家母来りて
 二時ありふありねまどひとみぎりの飯をいかにあはせけり家のつらさ
 を見まば財不富の家あつらひをいづり一椀の飯をいかにあはせけり
 を食ふはそあま音師とくゆりゆらとていかに墨繩制していかに物を
 ぞ。まづ是を喰へ。よき荔枝を知てあつらひまづ松光をよよりてあま
 大さなる推荐よては生母とていかにいかにいかにいかにいかにいかに
 り。いかにいかにいかにいかにいかにいかにいかにいかにいかにいかに
 かりとていかにいかにいかにいかにいかにいかにいかにいかにいかに
 仙童膳をさげまゝりて松光が前よまゝていかにいかにいかにいかにいかに
 墨繩子向ひてけり。いかにいかにいかにいかにいかにいかにいかにいかに
 物との事ぞいかに松光眉をちりあ頭うちあつていかに物のかたむら
 腹の鼓のやうありていかにいかにいかにいかにいかにいかにいかにいかに
 あつらひ。いかにいかにいかにいかにいかにいかにいかにいかにいかに
 松光さつらばなりていかにいかにいかにいかにいかにいかにいかにいかに
 らうあけつらばいかに仙童の膳をもちてあつらひ。いかにいかにいかに
 あつらひのいかにいかにいかにいかにいかにいかにいかにいかにいかに
 玉をつらねるいかにいかにいかにいかにいかにいかにいかにいかにいかに
 あつらひのいかにいかにいかにいかにいかにいかにいかにいかにいかに
 男の男女の位をいかにいかにいかにいかにいかにいかにいかにいかにいかに
 おがきんの威ありていかにいかにいかにいかにいかにいかにいかにいかに

各處の山々を巡りて此言を聞て墨繩松光も大に心おちつきてかの仙人も
のまの舟もて行てんをわとせむと出まぬ仙卒坐るかの美男子の左右の手
をさしてもいささかむし行するあまのりよのほかりなげん墨繩さのみ
出ていさかの若き地方を負なりてあつたあつた仙卒ら汝慈悲の心あり
殊勝もあつていさか若き人墨繩おとせり其時松
光其は瓢にあは持てあつて手みとりてやめをさるけ瓢にいはい
瓶のかちちりて上は鑊をさつちぎていさか石やあつて其質はあつたが
いさか若き物あり松光一人の仙卒向ひて瓢に何のいさか用する物母てゆる
と宣ふかの仙人答て云くるは仙界まで金丹のいさか薬を鑊車あるといさか
汝若き若き九俗もいさか仙卒をのこぬさつていさか仙卒あるといさか
薬を鑊るもいさか九百年なるを經さば母もあつたあつたかの男女の
仙人此金丹を鑊り作るべき徳を家へてありあつたいさか我を犯すも忍び
あひくるかよあつて得きまで金丹もいさかまうて御も丹のあつた事あり丹あり
けりかあつて成就せむあつたの瓢よりいさかたつたいさかをかの男女法を犯ねば
かゝ仙界をおひゆるありいさか松光もいさか大切の薬をいさか瓢にいさか
いさか何いさかの男女もいさか瓢をあつたいさかいさか仙人あつたいさか青い
いさか男もいさか瓢をかちちりていさか胎をいさかいさか後いさかいさかいさか
いさか時つていさか瓢を持ていさかいさか仙卒あつたあつたいさかいさか
いさかの瓢にいさかいさか仙卒あつたいさかいさか松光我故郷
あつたいさか瓢は炭炭固あつたをいさか備いさかかたつたの物をいさか仙界
は大事に志のいさかいさかいさかあつたいさかいさか一里あつた行くるいさか
いさか高き山にいさかいさかいさかいさかいさかいさかいさかいさかいさか

松光のいさか

いさか



蓬萊山
男の
仙の
人々を
罪子
行
不

飛騨面物語卷之一

飛騨面物語卷之一

いふてかんち文字をよむありたるをいふて頭くまて梅のこぞ

ハナカマシトスレドモ本屋

ヤク政ニ是ヲ許ス

頭ヲツケテ服セヨ

三拜

飛彈匠物語卷之一終

